

マタイ伝の見開き第1章に主イエスの系図がある。同様にルカ伝にもあるが、マタイは「父祖アブラハムからからイエスへ」を明確に示し、その意味を強調する。

イエスは最初からイスラエルの父祖アブラハムの生涯とその信仰抜きには考えなかったのだ。

アブラハムは創 11:26 に登場する故郷カルデアのウルの人。一族は父テラと共にウルから北上、バベルからユウフラテス川沿いでなくチグリス川沿いの道を水のある弓状地形に沿ってニネベを通りハランへ旅する旅人だった。

ある時アブラムは神から「わたしの示す地に行け」と命じられ、躊躇することなくカナン地方ネゲブに移り住む(12:9)。このことは意味深く、ヘブル書は「信仰によって、アブラハムは、自分が財産として受け継ぐ事になる土地に出ていくようにと、これに服従し、行く先も知らずに出発した」とした(11:8)。

ネゲブは今の地中海沿岸ガザ⇒ベエルシェバ⇒死海を結ぶ砂と小石以外何も無く果てし無き平原。彼らが此処に落ち着いた時は既に飢饉が始まっていた。アブラムも豊かなエジプトに目が行った。貧しさよりその豊かさに心引かれたのだ。

この時彼は妻サライを自分の妹と言ってファラオ・エジプト王に媚び、妻は宮廷に召し上げられ、多くの財を得た。

しかし、神はそれを見逃さず、王たちに重い病を課す。アブラムは再びネゲブに帰るが(12:10)、のちにゲラル地方の王アビメレクに、「事実彼女は、わたしの妹でもあるのです。わたしの父の娘ですが、母の娘では無いのです。それでわたしの妻とした」(20:12)と釈明し、アブラハムが王のために癒しの祈りを献げる場面もある。

かくしてアブラムはこの地で弟ハランの息子ロトと相互の羊保全のためロトを低地の肥沃地に行かせ、自らは高地の貧しいがmamreの木のあるヘブロンに上って祭壇を築く(13:18)。後に一族の墓所にも定める聖なる場所となる。

アブラムが主によってアブラハムと呼ばれたのは神が仕掛けた試練に打ち勝った信仰による。彼が全カナンの男子に割礼を施し、神の祝福と契約に立たせ、神との関係を明らかにさせたのだった。

更に子無き妻サライがサラと呼ばれたのも、神笑う意のあるイサク誕生の約束とアブラムとエジプトの女ハガルとの子イシマエルをも同時に祝福の内に入れたことによる(17)。

ヘブル書はそうしたサラの信仰を「それで死んだも同様の人から空の星のように、また海の数えきれない砂のように、多くの子孫が生まれた」と祝福した。

同書は「これらの人々は皆信仰を抱いて死にました。約束のものを手に入れませんでした。はるかにそれを見て喜びの声をあげ、自分たちが地上ではよそ者であり、仮住まいの者であることを公に言い表したのです。このように言う人たちは、自分が故郷を探し求めていることを明らかに表した」と。

サラは127才で古名キルヤト・アルバ(交差点・四町の意ヨシュア 14:15 はアナク人の著名な人物名)即ちヘブロンで死んだ。

アブラハムの嘆きと悲しみ深く、妻のため長老エフロンの言葉通り銀400シェケルを商人の通用銀の重さで量り、エフロンに渡し自分の所有としてmamreの前のマクベラの畑の洞穴に妻サラを葬った(23:1)。 (長崎哲夫牧師の説教要約)